

# 東北学院時報

2月・3月合併号

発行

学校法人 東北学院  
〒980-8511 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号  
電話 022-264-6423  
FAX 022-264-6478

編集兼発行人 原田 善教  
編 集  
法人事務局広報部

お電話相談窓口はこちら  
大学・大学院 ☎022-264-

学長室政策支援IR課 (調査依頼・各種補助金)	6424
アドミッションズオフィス (受験相談・資料請求)	6455
学生課 (学生生活相談・奨学金)	6471
教務課 (成績・各種証明書発行・大学院相談)	6451
就職キャリア支援課 (求人依頼・就職相談)	6482
財務課 (学納金・寄付申込)	6441
研究機関事務課 (公開講座・講演会)	6430

中学・高校 ☎022-786-1231  
榴ヶ岡高校 ☎022-372-6611  
幼稚園 ☎022-368-8600

ご購入のお申し込み・同窓生の住所変更、同窓会開催のご連絡は校友課へ  
☎022-264-6468  
振替口座 02240-9-883



## 大学、中学校・高等学校、榴ヶ岡高等学校

# 二〇二二年度 入学試験実施

四月から共学化がスタートする中学校・高等学校で、女子児童と生徒が受験する初の一般入学試験が実施された。

### 中学校・高等学校

中学校入試は一月六日と二十二日に実施され、募集定員百八十名に対し前・後期合わせて三百名(前年比百四十名増)が志願。二月一日、三日に行われた高等

学校入試は、一般・推薦合わせた募集定員三百六十名に対し推薦入試

五百六十九名(同五百二十名増)一般入試千五百五十二名(同七百十二名増)が志願し、中学校、高等学校ともに前年度を大幅に上回った。

多くの志願者が集まった背景には、創立以来男子校として歩んできた中学校・高等学校が、共学化を含む学校改革を進めることになった

子生徒を受け入れるようになったことが挙げられる。

二〇二〇年十月、これ直しや教職員研修を行うとともに、各校舎への女子トイレ設置、階段の目隠し工事、更衣室や女子用部室の設置、部室棟のトイレ改修工事などに速やかに着手。これらの工事は、今年二月末時点で全ての作業が終了し、共学化に向けた準備を着実に進めてきた。また、昨年七月に中学校

八月には高等学校で女子児童・生徒が参加する初のオープンスクールを開催。学校改革の説明や生徒たちによる学校紹介、体験授業、部活動見学、個別相談会などの多様なプログラムを実施し、学校の魅力を広くアピールした。期待の高さは申込者数にも現れ、中学校の部が前年の二・三・倍、高等学校の部では同三・八・七倍あり、女子の割合は約四分を占めた。これについて阿部校長は「先行き不透明で将来の予測が困難といわれる時代に

あつて、本校が打ち出している未来学力に期待を寄せていただいている感触を、多くの方々にご参加いただいたオープンスクールや学校説明会などから得ることができた」と話した。

中学校・高等学校では、新しい環境の中で従

来、「学力」に「主体性」「多様性」「創造性」を中心とする多様な資質や能力をプラスした「未来学力」を育み、変化の多いこれからの時代を「生き抜く力」を生徒一人一人が養えるよう全教員が一丸となって取り組んでいく。

二月一日と二日、土樋キャンパスをはじめとした十二の試験会場(仙台、札幌、函館、青森、八戸、盛岡、秋田、山形、鶴岡、福島、郡山、東京)で今年度の一般選抜試験(前期日程)が実施された。

期間中はすべての試験会場においてマスクの着用、手指消毒、室内の換気を徹底した。土樋キャンパスでは開門前の八時頃から受験生が並び、各会場では入構後に受験票確認が行われ、受験生たちは案内図を確かしながら足早に教室に向かい試験に臨んだ。

前期試験は六学部十六学科の定員千四百三十三名に対し八千七百七十六名(前年比二千九百三十三名増)が志願し、志願倍率は過去十年で最も高い七・八倍となった。このことについて牧野

梯也入試部長は報道各社の取材に対し「二日間最大六学科を併願できるようにした」とや、来年四月の五橋キャンパス開設に対する受験生の期待が大きい」と話した。

合格発表は二月十五日午後二時よりインターネット上で行われ、当日消印の速達で合格通知も郵送された。また三月四日には一般選抜(後期日程)が土樋キャンパスで行われ、同十四日に合格発表が行われた。

試験は一昨年末まで、隣接する大学泉キャンパスを使用していたが、二〇二三年に同キャンパスが移転することを見据え、昨年から会場を榴ヶ岡高等学校に移し行われている。

当日は新型コロナウイルス感染症対策として、サーモカメラによる検温を実施し、受験生にはマスクの着用と手指消毒の徹底を呼びかけた。校門付近から会場入口付近まで硬

式野球部の在校生が会場誘導を手伝い、受験生たちに「頑張ってください」と声をかけていた。受験生たちは在校生の応援に励みながらも緊張した面持ちで会場に向かい試験に臨んだ。

合格発表は二月七日午後四時よりインターネット上で行われた。

現代の日本社会には、「自己責任論」が広まっているといわれます。困難な状況に陥るのは対応策を怠った本人の責任だとして、救済措置を必要としない立場です。自分がそうした人生の負け組にならないよう、子どもの頃から就業意識を植え付けられるようになっていきます。こうした社会では、常に他人との比較の中で優越感や劣等感を感じて生きるようになります。誰かが苦しめばそれを蔑み、誰かが尊ばればそれを妬むことになってしまう。そのような社会は一つの体にはなっておらず、個々の人がバラバラに孤立しているだけの状態です。長く続くコロナ禍がそれに拍車をかけることになったとすれば、恐ろしいことです。



写真上：中学校入学試験の様子 下：高等学校入学試験の様子

と説明。発表以降は、女子生徒を受け入れるに当たり必要な校則の見直しや教職員研修を行うとともに、各校舎への女子トイレ設置、階段の目隠し工事、更衣室や女子用部室の設置、部室棟のトイレ改修工事などに速やかに着手。これらの工事は、今年二月末時点で全ての作業が終了し、共学化に向けた準備を着実に進めてきた。また、昨年七月に中学校

八月には高等学校で女子児童・生徒が参加する初のオープンスクールを開催。学校改革の説明や生徒たちによる学校紹介、体験授業、部活動見学、個別相談会などの多様なプログラムを実施し、学校の魅力を広くアピールした。期待の高さは申込者数にも現れ、中学校の部が前年の二・三・倍、高等学校の部では同三・八・七倍あり、女子の割合は約四分を占めた。これについて阿部校長は「先行き不透明で将来の予測が困難といわれる時代に

あつて、本校が打ち出している未来学力に期待を寄せていただいている感触を、多くの方々にご参加いただいたオープンスクールや学校説明会などから得ることができた」と話した。

中学校・高等学校では、新しい環境の中で従

来、「学力」に「主体性」「多様性」「創造性」を中心とする多様な資質や能力をプラスした「未来学力」を育み、変化の多いこれからの時代を「生き抜く力」を生徒一人一人が養えるよう全教員が一丸となって取り組んでいく。

二月一日と二日、土樋キャンパスをはじめとした十二の試験会場(仙台、札幌、函館、青森、八戸、盛岡、秋田、山形、鶴岡、福島、郡山、東京)で今年度の一般選抜試験(前期日程)が実施された。

期間中はすべての試験会場においてマスクの着用、手指消毒、室内の換気を徹底した。土樋キャンパスでは開門前の八時頃から受験生が並び、各会場では入構後に受験票確認が行われ、受験生たちは案内図を確かしながら足早に教室に向かい試験に臨んだ。

前期試験は六学部十六学科の定員千四百三十三名に対し八千七百七十六名(前年比二千九百三十三名増)が志願し、志願倍率は過去十年で最も高い七・八倍となった。このことについて牧野

大学宗教主任 木村 純二

**聖書のこぼれ**

一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

「コリントの信徒への手紙一 二二章二六節」

共に苦しみ、共に喜ぶ

新型コロナウイルスの猛威に見舞われて二年目の年度が終わろうとしています。その影響は社会のさまざまな面に現れています。厚労省の『令和三年版自殺対策白書』では、働く女性や児童・生徒の自殺者数が増加したと報告されています。社会が抱える危機や課題は、まず先に社会の中で弱い立場の人に襲いかかり、表面化するものです。感染症の対策がさまざまに議論され、同時に経済対策の必要性が叫ばれますが、心のケアへの対策に関しては、表立った議論がなされていないように見受けられます。

表題の聖句は「キリストの体」である教会の構成員を、体の部位・器官に例えた箇所の末尾の部分です。人間の社会や組織を人体ないし有機体に例えた論説は、より古い古代ギリシア思想にも見られますが、パウロによるこの第一コリント二二章の議論で驚かされるのは、単に各部位が独自の働きで全体を支えているという比喩にとどまらず「それぞれが、体の中でほかよりも弱く見える部分だが、かえって必要なのです」(二二章二節)と断言していることです。

体が不調な時には、真っ先に体の弱い部分に異変が生じます。その時点で対策を講じれば比較的軽症で抑えられますが、そのまま放置してしまうと全身が深刻な事態に陥ります。弱い部分はまさにその弱さによって、全体の危機をいち早く教えてくれているのです。

現代の日本社会には、「自己責任論」が広まっているといわれます。困難な状況に陥るのは対応策を怠った本人の責任だとして、救済措置を必要としない立場です。自分がそうした人生の負け組にならないよう、子どもの頃から就業意識を植え付けられるようになっていきます。こうした社会では、常に他人との比較の中で優越感や劣等感を感じて生きるようになります。誰かが苦しめばそれを蔑み、誰かが尊ばればそれを妬むことになってしまう。そのような社会は一つの体にはなっておらず、個々の人がバラバラに孤立しているだけの状態です。長く続くコロナ禍がそれに拍車をかけることになったとすれば、恐ろしいことです。

社会が共に苦しみに喜び、一つの体となるためには「愛」が必要です。この三月で東北学院を卒業して社会に出てゆく若者たちが、東北学院で学んだイエスの愛にしっかりと根を下ろし、新たに所属する組織が共に苦しみに喜び、一つの体となるために、よき働きをしてくれるよう祈ります。